

自己表現力の基礎を育む学習指導の工夫

～自分との関わりで段階的にまとまりのある英文を書くことの指導を通して～

南城市立大里中学校教諭 古 謝 栄 子

I テーマ設定の理由

知識基盤社会と言われる 21 世紀をたくましく生き抜いていくことを期待される生徒たちに、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を目指して「生きる力」を身に付けさせることが一層重要になっている。学習指導要領の改訂により、言語活動のさらなる充実が図られるよう外国語科においては知識を活用して、発信する力として身に付けさせる指導をしていくだけでなく、「読む」「書く」「聞く」「話す」の 4 技能の総合的な育成が図られるような改善も求められている。平成 25 年度には、文部科学省から英語教育改革実施計画が公表され、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるための新たな英語教育の在り方が示された。平成 26 年 9 月に公表された有識者会議の報告では、中学校における今後の改善の方向性として「身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。文法訳読に偏ることなく、互いの考えや気持ちを英語で伝え合う学習を重視する。」とある。本研究においても、書くことの指導を通じたコミュニケーションを自分との関わりで捉え、伝えたいことをまとまりよく書く視点を持って書かせる指導を重視したい。

日本語とは異なる語順を持つ英語の学習において、簡単な挨拶、曜日や日付、天候を含めた英語による簡単なやり取りは、日々の帯学習として取り組んでおり、それらの表現は十分定着している。しかし、言語活動においては、生徒は基本的な文型や表現、教科書本文の模倣を繰り返す傾向があり、教科書以外の語句や表現にあまり触れる機会がないまま英語の学習を続けているという実態がある。コミュニケーション能力の基礎を養うという視点から、形式的な表現に留まるのではなく、自分にとって必要な語句や表現を使って、伝えたいことが相手に伝わるように表現できる書くことの指導が必要だと考える。

今年度（平成 26 年度）、本校 1 年生に実施したアンケートでは、「読む」「書く」「聞く」「話す」のうち、書くことが苦手な生徒が約 4 割と、他に比べ最も高い割合となった。その理由として、「単語が書けない」「書き方がわからない」が半数以上を占めていた。これまでの指導を振り返ると、生徒自身との関わりにおいて単語を意味あるものとして十分使わせていない上に、まとまりのある英文を書かせる指導も不十分であった。また、英語を使って自分の思いを書き表したくなるような場面も十分提供できず、英作文の指導を行っていたという現状がある。自分の身近な生活や自分との関わりの視点を持って、自分の意図した通りに読み手に伝わるように書くことは重要な自己表現活動であり、書くことの意義がより深まると考える。

そこで本研究では、自分と関わりのある課題を通して書く活動に取り組みせ、実際の自分の生活に即した英文を書く活動を積み重ねていくことで、自己表現力の基礎が育まれると考え本研究テーマを設定した。

II 研究仮説と検証計画

1. 研究仮説

英文を書くことにおける学習指導において、自分との関わりで、段階的にまとまりのある英文を書かせる指導を行えば、自己表現力の基礎が身に付くであろう。

2 検証計画

検証授業の対象 南城市立大里中学校 1年4組 33名			
	検証場面	検証の観点	主な検証方法
1 事前調査	英語に関するアンケート実施	事前（12月）	アンケートの分析・比較
2 事後調査		事後（2月）	
3 検証授業	<ul style="list-style-type: none"> ・帯活動における英文作り。 ・自分にとって身近な人物について紹介する英文作り。 ・自分ができることについて、クラスメートに質問する言語活動を通して、自分とクラスメートのできること、またはできないことを表す英文作り。 ・自分の正月の過ごし方について説明する英文作り。 	<ul style="list-style-type: none"> ・つなぎ言葉を使っているか。 ・まとまりのある英文を書いているか。 	授業観察 ワークシート 英作文の分析・比較
4 まとめ	英語を書くことにおいて、自分との関わりで、まとまりを意識させた英作文の指導を段階的に行うことは、自己表現力の基礎が身に付くことに有効であったか。		1～3の結果の考察

Ⅲ 研究内容

1 中学校学習指導要領解説 外国語編にみる目標

(1) コミュニケーション能力の基礎

グローバル化していく社会において、様々な場面で英語の使用を迫られるだろう国際的な環境が想定され、単語の意味や文法の規則の知識だけではなく、実際のコミュニケーション場面を想定したそれらの活用が求められている。中学校学習指導要領外国語科の目標「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」の中において、コミュニケーション能力の基礎を養うことが最も重要視されている。

(2) 「書くこと」における基礎

上記を受けた具体的な目標が、学習指導要領外国語編第2節英語の目標である。(1) 初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。(2) 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。(3) 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。(4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。それぞれの領域におけるこれらの具体的な目標は、平成23年度から小学校高学年において外国語活動が必修化されたことで、「聞くこと」および「話すこと」については、小学校段階において英語に慣れ親しむことを踏まえているが、「読むこと」および「書くこと」については中学校段階が学習の始めとなり、英語を読むこと、書くことができる前に慣れ親しむことが優先されていると考える。

文部科学省による平成24年度小学校外国語活動実施状況調査において、中学生の81.7%が小学校で「英語の単語を書くこと」を、また78.6%が「英語の文を書くこと」をもっと学習しておきたかったと答えていることから、中学校においては、音声から文字への円滑な移行が行われていないとの指摘がある。書くことについては、単に書写としての書くことに留まらず、自分の考えなどを書けるようになることも重視されている。「書くこと」においては生徒がまだ入門期にいることから、書く機会を意図的につくることで、書くことに慣れ親しむ学習環境を整えたい。

2 自己表現力について

(1) 自己表現とは

田中・田中(2003)によると、自己表現とは「自分の知っていることや考えていること、あるいは自分の気持ちを他者に表現すること」だとしている。実際のコミュニケーションでは、物事を自分との関わりで受け止め、適切な言葉を使って表現することは重要だと考える。

(2) 書くことにおける自己表現

自己表現における「自己」を自分と関連したこととして捉える。生徒は、書きたいことと書けることのギャップがあると思われるが、自己との関連性がある内容であれば、より自分のこととして捉えることができ、自分の知っていることや考えていることを積極的に書く意欲につながるものとする。書くことにおける自己表現は、思考を文字化した表現活動であり、意味伝達を伴っている。文法事項等の定着のための英文作りは、形式に重点が置かれ、語句の制約や自由に書ける度合いが低い。しかし、本研究では書けることより書きたいことにより主眼をおいた自己表現活動に取り組みさせることを通して、よりメッセージ性のある自己表現力を養成したい。

(3) 自己表現を支える4つの要素

伝えようとする意図を持った実際の言語活動を想定するとき、自己表現を支える要素として田中・田中(2003)は「信頼感」「感受性」「想像力」「英語力」の4つを挙げている。田中らは、信頼感とは、友達が自分のことを理解し受け止めてくれるという安心感、感受性とは、外からの刺激を深く感じ取り、心に受け止める力、想像力とは、現実には存在しない事柄を頭の中で思い描いたり、普段考えてもみないことを考えたりする力、英語力は伝えたいメッセージを知っている語彙を使って表現できる力、多様な表現を考えられる力、うまくまとめて伝えられる力だとし、それぞれの要素を高めていくことで、自己表現に必要な力が育まれるとしている。

3 まとまりのある文章とは

大井(2008)は「まとまった文章というのは、『ある1つのテーマに関して、論理的一貫性を持って』書かれているもの」だとしている。それは、伝えようとする内容が焦点化され、その内容を表す英文一文一文が相互に関わり合い、何を伝えたいかがよくわかる文章だと考える。英語らしい文章を特徴づける要素として、大井(2008)は「結束性」と「論理の一貫性」を挙げており、これらに習熟していくだけの努力が求められるとしている。思っていることや考えていることをただ書くのではなく、自分の意図した通りに相手に伝えられる力は、自己表現力を身につける上で必要な力であるとする。そこで、書きやすいと思われる話題を設定した上で、まとまりを意識した英文で効果的に伝えられるよう書かせる工夫を行う。

4 まとまりのある文章への橋渡し

(1) つなぎ言葉の活用

大井(2008)は、英語らしい文章を特徴づける要素としての「結束性」は、(1)指示、(2)代用、(3)省略、(4)接続関係、(5)語彙の連関の5つの仕組みからもたらされるとしている。本研究においては、この中の「接続関係」に含まれる and, but, too のつなぎ言葉を活用し、それらを英文や文章の中に取り入れることで、つながりを意識した英文を作らせる。書くことの入門期にいる生徒でも、既習のつなぎ言葉を使ってつながりを意識させて英文を作らせることで、まとまりのある文章を書く素地を作りたい。

(2) 思考の整理

与えられた話題についてまとまりのある文章にしていく手立てとして、自分にとって必要な語句を書き出させた後、伝えたい内容にしばって考えた英文をどのような順序で構成していけばまとまりのある文章になるかを考えさせ、どの段階で何について考えればよいか、段階をふみながら思考の整理ができるようにワークシートを工夫する。

5 「書くこと」における言語活動の工夫について

(1) 相手意識を持たせる工夫

実際のコミュニケーションを想定した時、誰に向けて書くのが明確となっているはずである。「相手のことを考えずに独り善がりに、意見や考えを表現するだけでは、コミュニケーションは成立しません。表現する相手が存在してはじめて自己表現できるのです(田中・田中 2003)。」具体的な相手の存在を思い描いてこそ、伝えようとする意欲が起こり、伝えるための語句や表現を適切に使おうとする積極的な態度とも結びついていくと考える。誰に向けて書くのかという読み手を設定し、書くことにおける必然性を持たせる。

(2) 表現意欲を高める言語活動の工夫

田中・田中(2003)は自己表現活動を「必然性、具体性、自己関連性、自由度」において、それぞれ工夫すべき点を具体的に示している。必然性は「自ら英語で表現したいと生徒に思わせる状況をつくること」、具体性は「生徒に活動内容を具体的にイメージさせ、活動に取り組みさせること」、自己関連性は「例文や活動に登場する地名や人物を、生徒が身近に感じるものにする」とし、自由度は「答えが一つではなく、生徒自身の意志や判断によって主体的に表現させる部分を活動に取り入れること」とし、生徒がより意欲的になる課題を設定することで、表現意欲が高まるとしている。

(3) 言語活動の充実

平成 20 年中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申の中で、「言語は知的活動(論理や思考)の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤」とされている。言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において、各教科を貫く重要な改善の視点となっており、実際の言語使用を想定した言語活動の一層の充実が求められている。「中学校学習指導要領解説の外国語編第 2 節 2 内容(1) 言語活動(イ) 言語活動の取り扱いエ書くこと」の中においては、書くことの指導が文字や符号を扱う上での知識・技能の習得のためのみならず、それらの知識・技能を基盤に自分の考えを表現することを重要としていることが伺える(表 1)。実際の言語使用においては、コミュニケーションの対象によって生徒個々が必要とする語句の選択に個人差が出るのは当然と考えることから、教科書の既習事項の活用を含め、自主的な学習ができるよう辞書の活用も適宜取り入れる。

表 1 言語活動の指導内容

- | |
|--|
| (ア) 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書くこと。
(イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。
(ウ) 聞いたことを読んだことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。
(エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、 <u>自分の考えや気持ちなど</u> を書くこと。
(オ) <u>自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように</u> 、 <u>文と文のつながりなどに注意して</u> 文章を書くこと。
(下線筆者) |
|--|

IV 授業実践

1 単元名 Lesson 7 New Year 日本のお正月

2 単元設定の理由

(1) 単元観

言葉と文化について考えることのできる単元である。外国人のマヤとタクが日本特有の風習としての書き初めを体験する。「平和」のように、英語に直訳できる単語がある一方で、「もったいない」のように言葉の持つニュアンスや言葉が生まれた背景を含んだ言葉は、英語に直訳しにくいものもある。正月にいただくおせちに使われる具材には、すべて意味がある。日本語を理解できる者なら言葉に込められた意味が理解できるが、日本語を理解できない者に英語で説明しようとするのが難しいものがある。日本の正月ではおせちをいただき、アメリカの感謝祭には七面鳥をいただく。言葉

だけでなく、行事を通して、食する物にもその国の文化的背景が深く関わっていることを理解させたい。

(2) 生徒観

事前アンケートの結果から、英語を書くことが「苦手・やや苦手」と答えた生徒が 73%もいる。その理由として、「単語がわからない」に「よくある・たまにある」と答えた生徒が 85%、「単語のスペルがわからない」に「よくある・たまにある」と答えた生徒が 85%いる。「自分の考えていることを、どのような順序で書いていけばよいかわからない」に対し、「よくある・たまにある」と答えた生徒が 73%もいることから、英文と英文の関わりを意識させ、つながりのよい英文を考えて書かせる活動を取り入れることで、まとまりを意識して英文を書こうとする態度の育成につなげたい。

(3) 指導観

書くことを中心とした単元を貫く学習課題を設定する。書くことを苦手とする生徒も含め、1文でも多く英文を書くことの積み重ねが重要だと考えることから、①帯活動で生徒の日常生活に関連した簡単な英文を1文書かせる活動を行う。帯活動は英文を書くことに慣れる活動であるだけでなく、まとまりを意識して英文を書く活動でもあるため、②まとまりのある英文を意識して書かせるための手立てとして、つなぎ言葉の and を用いたモデルを示し、英文を1文書く課題を与える。また、③授業展開においては、and のみならず、but, too を加えた3つのつなぎ言葉を活用した書くことの課題に取り組みせる。帯活動でも授業展開においても、与える課題を自分と関連した内容で単元を通して書かせることで、書くことに対する意欲を高めさせる。

インプットとしての英文に触れる機会を増やすため、④例文を示し、まとまりのある英文の構成を示す。単なる英文の書き連ねで終わることなく、伝えたいことがわかるよう、まとまりのある文章を書く意識を持たせる。まとまりのある文章を書く際、⑤書きたいことを整理し、英文と英文に関わりを持たせ、順序立てて書くためのワークシートを作成する。⑥書いた英文を互いに読み合い、よりまとまりのある英文にするための視点を持たせ、アドバイスし合う活動を取り入れる。

書くことを中心とした課題を設定することから、⑦自分にとって必要な語句や表現をいつでも調べることができるよう、辞書を活用させる。

3 単元の指導目標（観点別評価基準）

(1) 単元の目標

- ① 辞書や教科書等を活用し、意欲的に書く活動に取り組む。
- ② 自分との関わりで英文を書くことに意欲的に取り組む。
- ③ まとまりを意識した英文の構成を考えて書くことができる。
- ④ お互いの英文を読み合い、書いてある英文の内容を理解することができる。

(2) 評価基準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
①質問したり答えたりして積極的に言語活動に取り組んでいる。 ②辞書や教科書等活用して英文を書いている。	①語句や表現、文法事項等の規則に気をつけて、正しく英文を書くことができる。 ②まとまりのある英文を書くことができる。	①まとまりのある英文を読み、書かれている内容を理解することができる。	①助動詞 can/can't を用いた文構造を理解している。 ②助動詞 can を用いた疑問文とその答え方を理解している。 ③疑問詞 when を用いた文構造を理解している。 ④正しい語順や語法を用いて、英文を構成することができる。

(3) 指導と評価計画

時	ねらい	学習活動	評価基準	評価方法
第1時	・まとまりのある英文を理解する。	モデル: I get up at six every morning. ・まとまりのある英文のイメージを持つ。 ・教科書の登場人物の会話等を活用し、まとまりのある英文として再構成する。	イ-① イ-②	・ワークシート ・活動の観察 ・自己評価
第2時	・自分にとって身近な人を紹介する英文を書く。	モデル: I get up at six every morning and _____. Capter2〇〇さんを紹介しよう ・まとまりのある英文とはどんな英文か確認する。 ・新出語句を理解する。 ・身近な人物を紹介する英文を書き始める。	イ-① ア-②・エ-④	・ワークシート ・活動の観察 ・自己評価
第3時	・自分にとって身近な人物を紹介する英文を完成させる。	・自分にとって身近な人物を紹介する英文を完成させる。 ・完成した英文をお互いに読み合い、英文を読んで気づいたことや感想を記入する。 ・自分の書いた英文を読み直し、推敲し、書き直しをする。	ア-② ウ-① イ-②	・ワークシート ・活動の観察 ・自己評価
第4時	・助動詞 can/ can't を用いた文構造を理解する。	モデル: I leave home at seven thirty and _____. Unit7 日本のお正月 ・can / can't の理解 ・I can~. I can't~. 自分のできることとできないことについて、つなぎ言葉 and, but, too を活用して英文のまとまりを意識して書く。 ・ペアでお互いのできることとできないことについて情報交換しあった後、and, but, too を使ってお互いのことについて書き表す。	イ-① エ-① イ-②	・ワークシート ・活動の観察 ・自己評価
第5時	・助動詞 can を用いた疑問文とその答え方を理解する。 ・本文の内容を理解する。	モデル: I come to school at seven fifty and _____. ・can を使った疑問文とその答え方の理解 ・自分のできることが、クラスメートもできるか質問し合う言語活動に取り組む。 ・言語活動からわかったクラスメートができることについて説明する英文を書く。 ・本文の内容 (Lesson7A) を理解する。	イ-① エ-② ア-① イ-① ウ-①	・ワークシート ・活動の観察 ・自己評価
第6時	・国による行事と食の関わりを知る。 ・自分の正月の過ごし方について、まとまりのある英文を書く。	モデル: I eat lunch and _____. ・日本の正月にいただくおせちの具材に込められた意味と、アメリカの感謝祭にいただく七面鳥について、行事につきものの食べ物をいただく習慣について考える。 ・自分の正月の過ごし方について考え、自分なりの過ごし方を説明するまとまりのある英文を書き始める。	イ-① ア-②・エ-④	・ワークシート ・活動の観察 ・自己評価
第7時 本時	・自分の正月の過ごし方について、まとまりのある英文を書く。	モデル: I go to the club and practice tennis after school. (部活動に入っていない生徒は、I go home and do my homework after school. のような英文を作る。) ・ワード・バンクにある単語を見て、自分に必要な単語を選択する等して英文を書く。 ・自分の正月の過ごし方について、まとまりのある英文で書く。	イ-① ア-②	・ワークシート ・活動の観察 ・自己評価

			<ul style="list-style-type: none"> グループでお互いの書いた英文を読み合い、英文を読んで気づいたことをアドバイスし合う。 アドバイスをもとに、よりまとまりのある英文を完成させる。 	ウー ① イー ②	
第8時	・本文の内容を理解する。	帯活動	モデル：I have dinner at eight <u>and</u> _____. ・本文の内容 (Lesson7B) を理解する。	イー ① ウー ①	・ワークシート ・活動の観察
第9時	・疑問詞 when の理解および本文の内容を理解する。		モデル：I _____ <u>and</u> go to bed at ten. ・when の理解 ・本文の内容 (Lesson7C) を理解する。	イー ① エー ③ ウー ①	・ワークシート ・活動の観察

4 本時の学習 (7/9)

(1) 本時のねらい

- ① 自分との関わりで、正月の過ごし方について伝えたい内容をまとまりを意識して英文を書かせる。
- ② お互いの英文を読み合うことで、よりよいまとまりを意識した英文を書く視点を持たせる。

(2) 本時の授業仮説

- ① 自分との関わりをふまえて、ふだんの正月の過ごし方について伝えたい内容を中心とした英文の構成を考えることで、まとまりのある英文を書くことができるだろう。
- ② お互いの英文を読み合い、アドバイスをし合うことで、よりまとまりのある英文へと修正を加えることができるだろう。

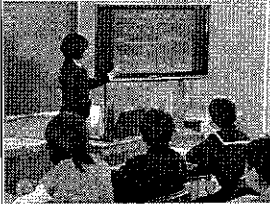

(3) 言語材料



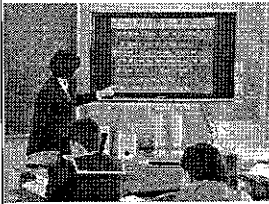

主語＋動詞を基本とした文構造、助動詞 can/can't, 一人称および三人称を表す主語および目的語、三人称単数現在の肯定文・否定文, be 動詞(am, is, are)の肯定文・否定文, 接続詞 and, but, too

(4) 評価方法

ワークシート, 活動の観察, 自己評価

(5) 本時の展開

過程	学習内容・学習の流れ	留意点	評価
導入 10分	①あいさつをする。 ②帯活動としての英文を1文書く。 (生徒の生活に関すること) and の活用 モデル：I go to the club <u>and</u> practice tennis after school. (部活動に入っていない生徒は I go home <u>and</u> do my homework after school. のような英文を作る。) ③めあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 自分が過ごす正月について、まとまりのある英文を書くことができる。 </div>	②机間巡視をし、支援が必要な生徒への手立てを図る。  ③前時の学習を思い出させ、本時のめあてを意識させる。	②語句や表現, 文法事項等の規則に気をつけて, 正しく英文を書くことができるか。 【イー①】 

Unit7 日本のお正月			
展開 37分	<p>④ワード・バンクにある単語を見て、自分に必要な語句を選択する等して英文を書く。</p>  <p>⑤自分のふだんの正月について、一番書きたいことや伝えたいことをまとまりのある英文で書く。</p> <p>⑥グループでお互いの書いた英文を読み合い、英文を読んで気づいたことをアドバイスし合う。</p>  <p>⑦アドバイスをもとに、まとまりのある英文を完成させる。</p>	<p>④プレゼンテーション・ソフトで単語を提示する。</p>  <p>⑤一番伝えたいことを中心にして書くようにさせる。</p> <p>⑥感想にならないよう、まとまりという視点からアドバイスをさせるようにする。</p> 	<p>⑤辞書や教科書等を活用して英文を書いているか。 【ア-②】</p> <p>⑥まとまりのある英文を読み、書かれている内容を理解することができるか。 【ウ-①】</p> <p>⑦まとまりのある英文を書くことができるか。 【イ-②】</p>
	<p>まとめ 3分</p> <p>⑧自己評価の記入をする。 ⑨次時の学習内容を知る。 ⑩自己評価とワークシートを提出する。 ⑪あいさつをする。</p>		<p>⑧めあての達成も含め、学習課題に対する自分の取組を振り返る。</p>

(6) 本時の評価

- ① 自分との関わりをふまえて、ふだんの正月の過ごし方について伝えたい内容を中心とした英文の構成を考えることで、まとまりのある英文を書くことができたか。
- ② お互いの英文を読み合い、アドバイスをし合うことにより、よりまとまりのある英文へと修正して書くことができたか。

5 授業仮説の検証

本時の授業仮説について、授業観察、ワークシート、自己評価の記述、振り返り（検証の視点をもとにした感想）をもとに考察する。

(1) 授業仮説①について

自分との関わりをふまえて、ふだんの正月の過ごし方について伝えたい内容を中心とした英文の構成を考えることにより、まとまりのある英文を書くことができたか。

正月らしい出来事を表す語句や英文をワード・バンク（資料1）で示したことで、自分にとって必要な語句の選択を行うことから始めた。56%の生徒が話題を決めて英文を書いたが、まとまりのある英文を書けた生徒は12%で、5文の目標に対し完成した英文は2～3文であった。ワード・バンクを示したことで、必ずそれを取り入れて英文

「お正月」に関する単語の例

お年玉	→ a New Year's present (gift)		
しめ縄	→ a scared straw rope		
鏡もち	→ a round rice-cake	おせち	→ osechi
初日の出	→ the first sunrise of the year		
神社	→ shrine	お寺	→ temple
初もうでに行く	→ I go for a New Year's visit to a shrine (temple).		

資料1 ワード・バンク

を書かなくてはいけないと思い、具体的に書く内容を絞り込めなかったことで、まとまりのある英文を書くことが難しかったと考えられる。

(2) 授業仮説②について

お互いの英文を読み合い、アドバイスをし合うことにより、よりまとまりのある英文へと修正して書くことができたか。

書いた英文を3名のグループで読み合い、お互いにアドバイスし合う場を設定した。アドバイスを読んで可能な修正をし、最後にアドバイスを受けて感じたことを書かせた。アドバイスを受けた感想として、「初もうでに行って、何するかを書いた方がいいと分かった」「つなぎ言葉をもっと使ってもっとまとまりがあって分かりやすい文にしたいなあと思いました」「書くことが少ないので、もっといっぱい書いた方がいいと分かった」等、まとまりのある英文が書けなかったことを表す感想が多かった。また、アドバイスの内容としては、「誰と初もうでに行ったのか具体的に書くといい」「初もうでに行ったら何をするかを書いた方がいい」「お年玉はいくらもらったかを書いた方がいい」等、43%の生徒が具体的なアドバイスをしている。しかし、「直す所はない」とコメントした生徒を含め、30%の生徒が感想のみになっていることから、アドバイスの視点をしっかり持たせることが、よりまとまりのある英文への修正へとつながるのではないかと考える。

V 研究の結果と考察

英文を書くことにおける学習指導において、自分との関わりで、段階的にまとまりのある英文を書かせる指導を行うことは、自己表現力の基礎が身に付くことに有効であったか。

研究の考察は、事前・事後のアンケート、ワークシート、自己評価等を活用して行う。

1 帯活動

授業の始めに、生徒の日常生活に関連した簡単な英文を1文書させる活動を帯活動として続けた。そのつど示すモデルに合う英文を作ることで、最終的には時間の流れに沿った一日の生活を表すまとまりのある英文になるように書かせた(資料2)。実際の自分の生活を表現するために自分にとって必要な語句を辞書で調べた生徒も多く、教科書にはない表現も見られた。このことから、自らの意志や意欲を持って知り得た自分と関わりのある語句や表現は、自分の語彙としてより定着が図られると考える。

<p>I leave home at seven and <u>call at</u> A house.</p>	<p>I come to school at seven forty and <u>greet</u> at the school gate.</p>
<p>(7時に家を出て A の家に寄る。)</p>	<p>(7時40分に学校に来て校門で挨拶する。)</p>
<p>I come to school at seven fifty and <u>chat with</u> friends.</p>	<p>I eat lunch and <u>clean</u> stairs.</p>
<p>(7時50分に学校に来て友達とおしゃべりする。)</p>	<p>(給食を食べて階段をそうじする。)</p>

資料2 帯活動での生徒の英作文(1)

帯活動で自分の日常生活を表す英文を書く際、英文に対する添削はすべて教師で行った。資料3のようにコメントや訂正を加えたところ、次時の英文作りにおいて自ら修正を行った英文が見られた。自分にとって必要な語句や文構造の理解は、自分と関わりがある課題に取り組む中で、表現力とより深く結びついていくものと考えられる。

I eat lunch and I clean our classroom. ↓ 2項目のand. 7.42と11.25だよ。	→	I go home <u>and read comics.</u>
I have dinner at seven and watch a TV.	→	I <u>watch TV</u> and go to bed at ten.
I come to school at seven forty and talk ^{with (~)} my friends.	→	I eat lunch and <u>talk with my friends.</u>

資料3 帯活動での生徒の英作文(2)

2 つなぎ言葉の活用

英文を書く活動において、つなぎ言葉(and, but, too)の活用を意識させて英文を作らせた。帯活動では and のみを活用させ、and で挟まれた前後の英文の内容がつながることを目指し、and で挟まれた前後の英文のいずれかは提示するが、残りは自分で考えて書かせた(資料4-①②)。自分との関わりで英文を書くという視点から、生徒個々の実際の生活に応じて時間は変更させた。この活動を続けることで、積極的につなぎ言葉を使って長い英文を書く生徒も見られるようになった(資料4-③)。

①andの前半を考える
I <u>play game</u> and go to bed at <u>eleven</u> .
②andの後半を考える
I get up at <u>seven</u> every morning and <u>take a shower</u> .
③andを使った長文
I have dinner at <u>seven thirty</u> and go to a Juku <u>but Tuesday and Thursday only</u> .

資料4 帯活動での生徒の英作文(3)

授業展開場面では、ペア活動や一斉の言語活動を通して得たクラスメートの情報を元に、自分と比較して共通してできること、できることが異なること等を表す英文を作るため、つなぎ言葉 and, but, too を活用させた(資料5)。

帯活動および授業展開場面において、つなぎ言葉を活用した英文を書かせる活動を継続したことで、2文に相当する英文を書くことにつながった。また、クラスメートと自分を比較して英文を作らせる活動は、つなぎ言葉の使用を促進し、まとまりのある英文を書かせるための橋渡しの役割を果たした。このことから、つなぎ言葉の活用は、まとまりのある英文を書かせる手立てとして有効だったと考える。

can't eat tomato but I can

I can ride a roller coaster and ride roller coaster too

資料5 授業展開場面における生徒の英作文

3 まとまりのある英文を作る課題を通して

第3時では、教科書にあるモデルの活用を含めた身近な人物を紹介する英文作りの課題を設定した。「身近な」という人物設定は、生徒にとっては書きやすいものになると期待したが、自己紹介を含む英文での紹介文は教科書の中にもよく出てくるため、教科書のモデル文を真似るだけの英文を書いたり、教科書のモデル文から抜け出せない英文を書く生徒も多かった。紹介する人物の特徴をじっくり考えさせた上で、単純にモデル文を真似るだけでは表現できないような紹介文を書かせる必要があった。資料6-①②は、教科書のモデルに頼らず、紹介する人物についてまとまりよく書いてある例である。資料6-②は、教科書にはないつなぎ言葉 because を積極的に使っている。しかし、使い方の理解が不十分で、文構造に一部不適切な使用が見られた。

①

This is [redacted].
He is my childhood friend.
He likes table tennis.
[redacted] and I in the table tennis club.
He is good at table tennis.
He is a good practice partner.

②

This is [redacted].
She's my friend.
She loves SpongeBob and natto.
She's very funny and very kind.
because she has many friends.
She's good at basketball.
She's cute.
I love her.

資料6 「身近な人物紹介」の英作文

第7時では、正月についてイメージさせ、その中でどの出来事について書くか話題を焦点化させたが、馴染みの薄い語句や表現を使用する必要があったため、思考の整理に時間を要し、話題を広げて書くにはやや困難な状況が見られた。しかし、資料7のように正月の過ごし方について具体的に書けた生徒もいた。話題を選定する際、生徒が必要もしくは活用すると想定される語句や表現について、どの程度の習熟があるかを把握し、習熟の程度によってまとまりよく書けるまでの時間配分を十分行う必要がある。また、正月をどう過ごしたかを書きたかったと答えた生徒が多かったことから、動詞の過去形が十分使える第2学年以降で扱うのが適切だと考える。

I get a New Year's present
from my relative every Year.
I get ten thousand yen.
I buy writing materials.

資料7 「自分が過ごす正月について」の英作文

表2 英作文課題のワークシート分析

項目	課題(実施月)	①身近な人物紹介(12月)	②正月の過ごし方(1月)
ア	理解可能な平均英文数	4.2文(目標5文)	0.84文(目標5文)
イ	理解可能な英文における平均単語数	13語	10.8語
ウ	つなぎ言葉の種類	and, but, too 全て	andのみ
エ	つなぎ言葉の使用率	40.6%	23%

表2は、上記の第3時および第7時における英作文のワークシートを分析・比較したものである。表2のア「理解可能な」とあるのは、書く内容を重視する視点から、綴りのミスはあっても、伝えたい内容が推測でき、主語と動詞を含む文を原則とした上で、動詞が適切に変化していなくても許容範囲とした。イ～エの項目は全て、ア理解可能な英文が元になっている。イの「単語数」については、同じ単語は1語と数え、人名のローマ字は含まれていない。①②とも、目標は5文書くことであったが、理解可能な英文として書いた英文の数に差がある。①は、小学校における外国語活動で自己紹介等を経験しているため、自己紹介で慣れ親しんできた表現を他己紹介でも活用することができた。しかし、②は正月に関連する語彙と慣れ親しんできた程度が低かったと思われ、1文書くのが精一杯な生徒がほとんどであった。①②とも、自分との関わりで英文を書かせたが、②については、事後アンケートで、「お年玉に関連したことならもっと書けそうだった」と答えた生徒が多かったことから、もっと生徒の視点に立った話題の選定が必要であった。まとまりのある英文が書けるようになるためには、既習事項と関連させた話題の選定を含め、話題に必要な語彙の素地作りを計画的に行う必要があると考える。

生徒が書きやすくなるような話題を設定する際、語句や表現の制約が緩やかになり、自由度が高まるが、生徒の実態や生活背景、既習事項等を十分把握していなければ、書く内容の素地さえも作れないと考える。①と②においてアの「理解可能な平均英文数」に顕著な差が現れたのは、話題を具体的にイメージさせることができなかつたためと考える。具体的にイメージして活動に取り組みせることは、生徒の表現意欲を高めるために必要な工夫であり、生徒が見通しを持って書けるようになるために、例文を提示することやマッピングの活用等でイメージを具体化する手立てが必要であった。

事後アンケートで「英文を書くときに、まとまりを意識して書くことができましたか」の質問に73%の生徒が「できた・まあまあできた」と答えたが、①の話題によってほとんどの生徒が英文を書けたことから、できた実感した生徒が多くなったと考える。

4 辞書の活用を通して

自分にとって必要な語句や表現を身に付けるために辞書を活用させた。辞書の活用についての変容(図1①)を比較したところ、事前アンケートで「英語の辞書(英和・和英)は使うことができますか」の質問に、「なかなか使えない」と答えた生徒が15%、「うまく使える」と答えた生徒が9%であったが、事後アンケートでは、「うまく使える・まあまあ使える」と答えた生徒が94%とほぼ全員が使えるようになり、「全く使えない」と答えた生徒が検証後は0%になった。また、事後アンケートで「検証授業で辞書は使いましたか」の質問に、79%の生徒が「よく使った・ときどき使った」と答えていることから(図1②)、辞書の活用により、辞書の使い方が身に付いてきたと考えられる。辞書の活用が自分にとって必要な語句や表現を習得する手段となっていくものと考えられる。

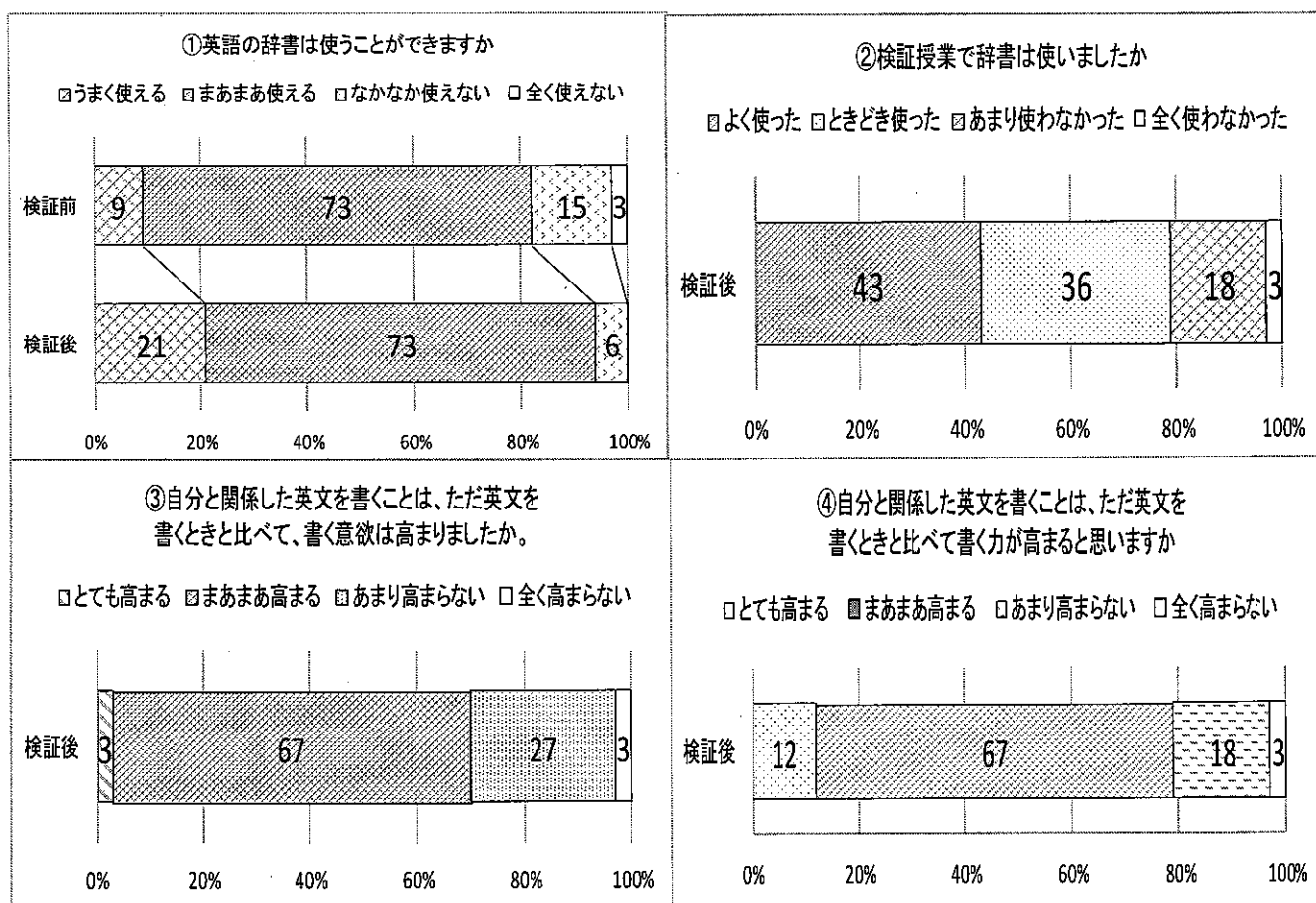


図1 アンケート結果

以上1～3に関連して、単元を通して自分との関わりで英文を書かせることで、事後アンケート「自分と関係した英文を書くことは、ただ英文を書くときと比べて、書く意欲は高まりましたか」の質問に、70%の生徒が「とても高まる・まあまあ高まる」と答えており(図1③)、自分のこととして受け止め、より高い関心を持ったことがうかがえる。また、「自分と関係した英文を書くことは、ただ英文を書くときと比べて書く力が高まると思いますか」には、79%の生徒が「とても高まる・まあまあ高まる」と答えた(図1④)。自分に必要な語句や表現を調べていく中で、それらを習得していく手応えを自分なりに実感してきていると考える。

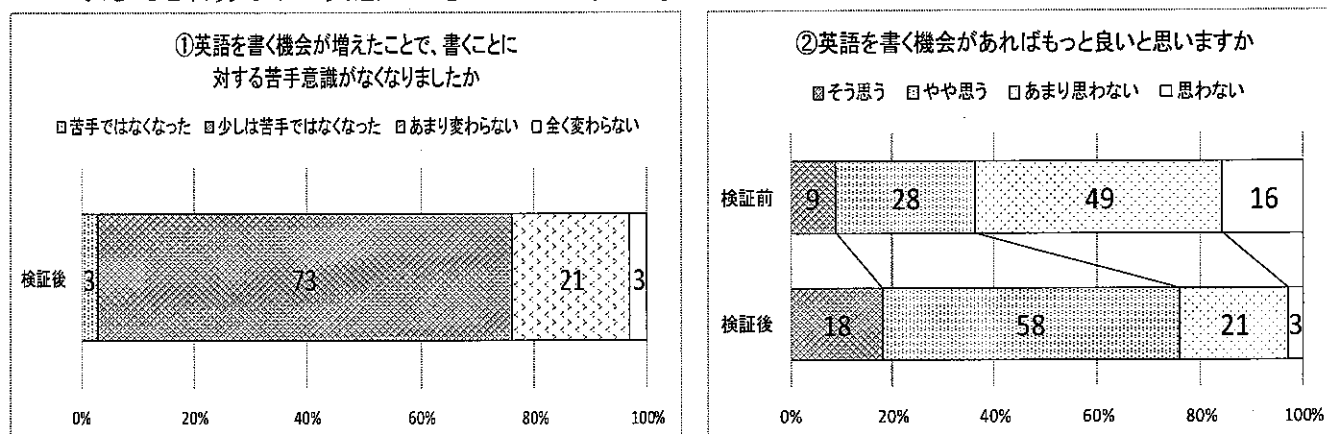


図2 生徒の「書くこと」に対する意識の変容

帯活動のように短時間でも書くことの課題を設定したり、単元を通して書くことの指導に重点をおいて書かせたりしたことで、事後アンケートでは英語を書く機会が増えたことで、書くことに対する苦手意識が「なくなった・少しはなくなった」生徒が76%となった(図2①)。書くことを継続して行うことが、生徒の苦手意識を軽減するだけでなく、英語を書こうとする意欲にもつながった(図2②)

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 自分との関わりについて単元を通して書かせる課題に取り組ませたことで、より高い関心を持って英文作りに取り組むことができた。(V1~3)
- (2) つなぎ言葉を帯活動や授業展開の中で活用し、文と文の関わりを意識して英文を書いたことで、まとまりのある英文を形作る基礎を身に付けることにつながった。(V3)
- (3) 辞書等の活用を通して、自分と関わりのある語句を選択・使用していくことで、英文の質を高めることにつながった。(V4)

2 今後の課題

- (1) 帯活動の活用および単元に書くことの重点をおいた指導の継続。(V1~2)
- (2) 具体的に書くための見通しやイメージを持たせる指導の工夫。(V1~3)
- (3) まとまりのある英文を書く課題における、既習事項と関連させた学年に適した話題の吟味および設定。(V3)

〈主な参考文献〉

田中武夫・田中知聡	『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店	2003年
大井恭子編著 田畑光義・松井孝志著	『パラグラフ・ライティング指導入門』大修館書店	2008年
文部科学省	『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂	2008年
文部科学省	『評価基準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 外国語】』	2011年
文部科学省	『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～【中学校版】』	2012年
国立教育政策研究所	教育課程研究センター	
	『特定の課題に関する調査(英語:書くこと)調査結果(中学校)』	2012年
文部科学省	『平成24年度小学校外国語活動実施状況調査』	2012年
文部科学省	『英語教育の在り方に関する有識者会議における審議の詳細』	2014年